

変わりではなく、あらゆる遺伝子および環境的な状況によって形成される新たな個性である。ということは、われわれは、まるでリレーの走者のように、自分に任された時間において、充実な生を営むことによって、将来の霊的な完成に向けて貢献できるということを意味する。以上のように、ヒックが擁護しているのは、長い間、人間歴史の中で刻まれている人間の宗教性、その気質である。そして、その根本を支えるのが「宇宙的な楽観論」である。その中身は人間に対して多様な原因から訪れる様々な苦痛などを認め、自分が信じている宗教の教え——救い——にしたがうと、それらの苦痛は乗り越えられるということである。

今回の発表では、「死後世界」があることを信じながら行う信仰生活の意義や宗教的な観点から「死後世界」が持つ意義に関してある程度検討することはできた。

内観と悲哀

寺尾 寿芳

カトリック内観瞑想とは、浄土真宗秘事法門の「身調べ」を基礎に「していただいたこと、して返したこと、迷惑をかけたこと」の三点から自己の罪悪深重さを自覚する心理療法として吉本伊信が開発した内観法を藤原直達がかトリックの瞑想に適用したものである。方法論的には吉本内観法を踏襲するが、カトリックの霊性からミサを頂点に位置づける独自性をもっている。その内観対象として死者が重要な位置を占め、そこに「復活」の人間学的理解を手がかりとした生者による「悲哀の仕

事」を見て取ることができる。

新約学者の佐藤研はフロイトの喪の仕事を契機に復活を非合理的ヌミノーズ体験として理解し、そのなかで「悲哀の仕事」を特徴づけているが、筆者はそれをさらに簡潔化して、死者の實在感、怒りの感情、死者との運命の共同化、再会のヴィジョンの四点にまとめてみたうえで、この視点から藤原内観瞑想を読み解いていきたい。その際、藤原による素朴で直截的な初期の著作(『東西のはざま』)および『心の内なる旅』を考察対象とする。

第一の「死者の實在感」については、藤原の死後生観は一種の生前煉獄説であり、その死のリアリティは強く、内観瞑想の現場は「死境から眺め」として描写される。「去った人があたかも屏風から搭乗してくるかのような経験」とともに、生者がいわば生きながら死者となり、その境位で関係の連続性が確保される。「二人の内観者の後ろには何十・何百・何万ものひとが連なっている」のであり、しかも内観に発する強烈な罪悪感や負い目の自覚によって「心乱される」なかで、「他者によって私の隠れた闇を照らし出して頂いている」という内面の相互照明も主張される。こうした共同的な「陰府下り」へと導く機能を藤原はシャーマニズムや佯狂者などの痴聖に見出し、そこから司祭を世界離脱的で「パワーレス」な仲介者とする。擬似死体験の場でシャーマン的な司祭に見守られながら、「死者」同士の「聖徒の交わり」として一種の変性意識状態に到達することが目指されている。

第二に「怒りの感情」については、内観瞑想が生死を越境し

て死者として交わりあうという非日常の極みを志向する以上、そこでは原則から逸脱する感情の非合理的表出もありえよう。そこには回心のみならず、人間学的には世界破壊的な悪魔的事態もありえる。そこで藤原内親暎想は呼吸法による存在論的祈りを同行司祭の指導のもと実践している。それは「死境」つまり呼吸などの生命維持をつかさどる脳幹での出来事とされる。しかし日常的意識への復帰に際して苦悩はたえず復帰してこよう。そこで要請されるのは悲哀に配慮した、怒りに関するいっそう繊細な識別であろう。たとえば、良い怒りである「オルゲ」が悪い怒りである「スーモス」との区別などが示唆深い視点を提供しよう。

第三に「死者との運命の共同化」であるが、最も特徴的な点は覚鑿の「密厳院発露懺悔文」をうけた「代理内親」の可能性である。死者に代わって生者が内親を行うのである。その実践は聖金曜日の典礼を範型とするが、典礼への依拠は人間学的にいつて典礼が形式主義へと容易に頹落しやすいことから、持続性に不安が伴う。

第四に「再会のヴィジョン」については、藤原が「若い時に内親する事は結構なことですが、老境にいたって生涯を内親し死の準備をすることは、老境時の大きな仕事といえるのではないでしょうか」と語っていることが示唆深い。老人の祈りは「かつて老人だった人」つまり死者との対話といえるが、それはまさしく再会のヴィジョンを基礎付ける。

「三・一一」以降、われわれはいわば悲哀の仕事として死者への眼差しをずいぶんと深めてきた。最も伝統的な教団の司祭

であり、最も伝統的な宗教的靈性を活用しつつ、きわめて脱正統的な実践形態を作り上げた藤原内親暎想は今後ますます注目に値しよう。

Corpora incorrupta に関する思想的考察

ジョン・モリス

本発表では、中世、特に中世後期のヨーロッパにおける *corpora incorrupta* の思想史と文化的文脈を紹介する。聖人遺骨分配の最盛期であったその時代において、その腐敗しない「全身遺骨」である *corpora incorrupta* は、どのような意義と魅力を持っていたのだろうか。*anima/animus* (精神) と *caro* (肉、つまり、体や亡骸— *corpus*・*corpus corporis*—と異なる) と神聖性、純粋性、死後の存在や復活に関する諸問題をめぐって、中世後期の思想家の間で多くの論争がわき上がった。それは中世後期における *corpora incorrupta* となった聖人の崇拜をめぐる思想的背景の一部として認識されなければならない。発表者のこのテーマに関するこれまでの研究では、中世において、*corpora incorrupta* が可能とした聖人に内在する天国、あるいは、この世の官能をめぐる見解を展開した。

本発表では、中世中期・後期において、肉が完全に腐敗し遺体が骸骨になるまでの時期が、危険であり不安定であったことを論じる。その死後の時期、生きている人々が死者の罪深い肉・精神により害を受ける恐れがあった。逆に、聖人の *corpora incorrupta* は、最も聖なる肉を有していたと言える。しかし、その肉とその聖人の *ratio* や合理的「個人性」の関係が